

シニア世代の写真・映像芸術プロジェクト

## FOTOZOFIO OFFLINE 2023 KYOTO



©Yutaka Hashimura

### 人類の経験と記憶

#### FOTOZOFIO

あなたの人生はあなたが語らなければ歴史に残らない

「FOTOZOFIO」はシニア世代のアーティストを対象にしたオンライン写真・映像芸術プロジェクトです。50歳以上のアーティストの経験と記憶をテーマにした写真や映像のプロジェクトを招待または公募し、彼らの想いを次世代に伝えることを目的にサイトにアーカイブしています。今年3回目となるオフラインイベント「FOTOZOFIO OFFLINE 2023 KYOTO」では、京都市内の2会場で作品の展示とセミナー等を開催します。

三条通新町では期間限定のFOTOZOFIOセンターをオープンし、スライドショーによる作品の展示とセミナー、ポートフォリオレビューを行います。

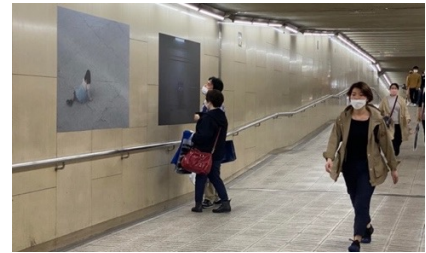
また1日2-3万人の通行人がある市内中心部の四条通東洞院地下道では、1ヶ月にわたり14人のアーティストの作品を展示します。

### 目的

- ・世界中のシニア世代の創造性を同時代の人々に発信すること
- ・集まった作品を人類の経験と記憶として次世代に伝えること

○イベント会場・展示期間・時間

▷**四条通東洞院地下道** 2023年4月14日(金)-5月14日(日)  
京都市下京区長刀鉾町付近地下（京都市営地下鉄四条駅・阪急電車烏丸駅の18-19番出口付近）  
連絡先：075-205-5396



四条通東洞院地下道

・FOTOZOFIO 2023 写真展 4:40~24:10（19番出口）  
入場無料  
国内外から参加する14人のFOTOZOFIOアーティストの作品シリーズの一部を壁面で展示します。

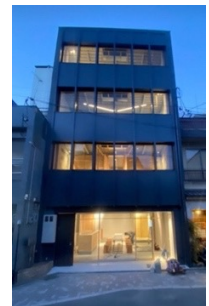
▷**FOTOZOFIOセンター**  
2023年4月14日(金)-4月23日(日)  
〒604-8203 京都市中京区衣棚町38-1 O-DEN Bldg. 1F  
連絡先：075-205-5396  
（O-DEN Bldg. 内の Skeleton Crew Studio へのお電話や訪問はご遠慮ください）



FOTOZOFIOセンター

・FOTOZOFIO 2023 作品スライドショー上映展  
11:00-18:00 入場無料  
国内外から参加する14人のFOTOZOFIOアーティストの作品シリーズをスライドショーで上映します。

・FOTOZOFIOセミナー 講師：土田ヒロミ（写真家）  
テーマ：「経験と記憶と作品制作について」  
4月22日(土) 16:00-18:00 \*終了後、ささやかな交流会を開催します。  
予約制：定員30名（先着順）\*後日ビデオアーカイブをサイトで公開する予定です。  
参加費：1000円  
申込締切：4月21日(金)17:00



O-DEN Bldg.

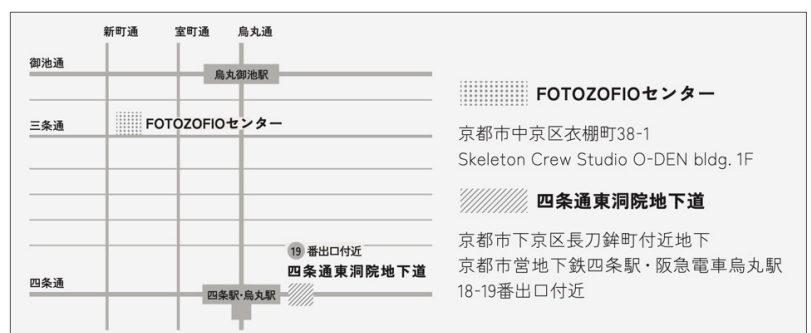
・土田ヒロミ 公開ポートフォリオレビュー  
4月23日(日)14:00-17:00  
予約制：定員 参加者10名 見学者10名（先着順）  
参加費：参加者3000円、見学者1000円  
参加者はA4サイズ以上の写真作品20枚前後を持参。（最大100枚、どうしても無い場合はキャビネでも可）  
卓上に作品を並べ取り囲んで、参加者1人につき約15分間ずつ順番に講師が参加者や見学者とともに講評します。

## お申し込みフォーム ←ご予約はこちらから

・FOTOZOFIO ポートフォリオレビュー 1  
プリントやデジタル媒体の作品を持ってFOTOZOFIOセンターへお気軽にお越しください。  
運営メンバーのいずれかが作品を見てコメントを差し上げます。  
レビュアー：佐藤正子（写真展企画制作 株式会社コンタクト代表取締役）、高橋淳子（キヤノン株式会社「写真新世紀」担当）、  
伊藤京子（細見美術館主任学芸員）、泉川真紀（キュレーター、泉川真紀事務所）、カルドネル島井佐枝（アートプロ  
デューサー、MUZ ART PRODUCE代表）  
日時：4月14日(金)、15日(土)、16日(日)、21日(金)・・・11:00-18:00  
4月22日(土)、23日(日)・・・11:00-12:00  
参加費：20分1000円（予約申込 <https://airrsv.net/fotozofio/calendar/>）

\*参加費は当日会場でお支払いください

主催：MUZ ART PRODUCE (MUZ株式会社)  
協賛：DMG森精機株式会社  
株式会社Skeleton Crew Studio  
後援：京都市 京都府 京都新聞 毎日新聞京都支局  
朝日新聞京都総局 読売新聞京都総局





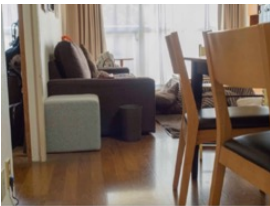
### 石崎 幸治 Koji Ishizaki “多視点風景写真”

多視点で画面を構成したセザンヌや様々な視点からのバラバラの認識を1つの画面に構成したピカソに倣って、カメラに内蔵されている画面を五分割撮影できる機能を利用して普段見慣れている風景を多視点で記録したシリーズ。既視感を覚えてしまうようなありきたりな風景写真ではなく、新しい視点で独特の光景を表現している。



### 伊波 一志 Kazushi Iha “najimun lens 地名遊行”

『majimun』とは、琉球弧に伝承される魔物の総称であり、『lens』とは文字通りカメラの「レンズ」という意味のほかに「眼の水晶体」を表す。加えて、地名や場所に意味がある被写体に特化したのが本作品である。可視光線しかとらえられない、つまりは現実的にそこにあるものしか写すことのできないカメラを用いて「あの世とこの世」「死と生」「過去と現在」の境界・はざまにある具象を写すことを試みたシリーズ。



### 榎本 八千代 Yachiyo Enomoto “20050810”

幼い一人息子を事故で亡くし、その事実をどうしても受け止めることのできなかつた作者が遺品の撮影を通して「喪失」の記憶に向き合うために制作したシリーズ。それは「喪失」への対峙でありながら、作者自身の人生を「遺品」から解放することを意味している。そして、これらの作品を発表することによって、「遺品」の持ち主が生きていた証を残す。



### 叶野 千晶 Chiaki Kano “Hidden Christian Story”

2021年に長崎県の五島列島を巡ったのち、2022年、カクレキリシタンが所有していたマリア観音像を撮影するために長崎市の外海地区を訪れた際に制作された作品。実際にカクレキリシタンの7代目に会い、またその暮らしや信仰の歴史に触れる。



### 窪田 典子 Noriko Kubota “being”

精神科の医療現場にいる作者が、日々森の中で撮影を行い、置かれた場所で命をつなぐ自然の小さな存在に目を向けたシリーズ。森を構成し大地に根付くものたちの息吹を捉えながら、微力であっても何かの糧になり循環している世界を描く。



### セバスチャン・C・クロフォード Sebastian C Crawford “鉄路”

通勤の行き帰りのほんの数十分の風景を切り取り、日常生活の中に潜む造形美を見出すシリーズ。車窓の風景は毎日同じであるが、日の出・日の入りの時間の変化によって車内の様子は異なる。また建物も、光線の差異によってまるで生き物のように、さらには人格を持っているかのようにさえ見える。



### 佐藤 泰輔 Taisuke Sato “路上ライフ・スタイル”

名古屋市の中心部、名古屋高速道路2号東山線の高架下で雨を凌いで暮らすホームレスの人々をとらえた物語。彼らがいかにしてホームレスとなったのか、何故抜け出せない、もしくはホームレスを続けているのか。実際に彼らの“ホーム”を訪れ、同じ時間を共有した作者によって、彼らの人間性や感情の奥にある人間の本质が描き出される。



### 佐藤 泰輔 Taisuke Sato “夢の中”

性差からの解放が叫ばれている世の中とは別の視点として、作者本人のジェンダー観をテーマにした作品。自身に男兄弟しかいなかったこと、また会社で管理職にあったことから、女性をカテゴライズし、また対人関係でも男女の関係性はフラットではないと感じていた作者。ペイントを塗布するなど数多くの手を加えた上に現像や調色を繰り返したサイアナタイププリントを用い、まるで夢の中に出てくる女性のような、被写体を超えた作者独自の女性像を提示している。





### イェンツ・サンドハイム Jens Sundheim “Of Ants and Star Polyhedrons”

この作品は、ボーフムのルール大学構内にある複合施設の風景と校内で出会った科学模型を撮影したものである。科学と同じように世界を探求できるツールである写真を用いて人間の知識の複雑さにアプローチし、その可視性を追求している。繰り返される幾何学形態は、科学の研究における自然界と文化圏の多層的な相互作用を暗示している。



### 角田 和夫 Kazuo Sumida “シベリアへの旅路 — 我が父への想い”

1987年67歳で生涯を閉じた作者の父の遺品の中から戦時中の手記が見つかる。1937年に志願兵として満州に渡った後、1945年に日本敗戦後にシベリアへ抑留され帰国するまでの10年間の出来事が綴られていた。1996年にその足跡をたどり、現地の人々の素朴な生活を捉えた旅の記録。



### 田村 美樹 Miki Tamura “楽園散華”

花の美しさを表現するために、「死んだ」状態である切り花を用いて撮影したシリーズ。妖しくも美しい実の色が映された写真からは、切り花は死んでおらず生きて実となっていることが見て取れる。まるで死んだ女性が身籠るような、怖さを美しさと同時に感じるシリーズ。



### ブノワ・デュピュイ Benoit Dupuis “Action Painting”

2020年の後半に香港で起こった大規模デモ。香港を横断するトラムの各停留所に設置された広告看板に残された民主化を求めるデモ隊のスローガンを撮影したシリーズ。スローガンが書かれては翌日に洗浄され、また書かれては消され、を繰り返した結果、何が書かれているか判別不可能となってしまった広告看板は、デモ隊と警察の対立の痕跡である。



### ブノワ・デュピュイ Benoit Dupuis “Shooting People”

2008年に都市に暮らす若者たちの姿をとらえたシリーズをコロナ禍に振り返る。2020年に新型コロナウイルスが流行してから、人々はマスクをつけて生活をするようになってしまったために数年間このような写真を撮ることは難しくなった。「これらの写真が撮られた日々は再び訪れるのか、もしくは永遠にマスクを着けたままの生活を送るのだろうか？」



### 土井 弘介 Hirosuke Doi “NYC, 奇跡の出会い”

1971年、無計画で日本を飛び出し、カナダを経てニューヨークの街に漂着した作者。ある時アービング・ペンの助手をしていた友人の紹介でヘルムート・ニュートンの短期助手をすることになる。その際一緒に仕事をした俳優でダンサーのジェフリー・ホールダーと親しくなり、彼の紹介を通して出会った、ジミー・カーターやアンディー・ウォーホルをはじめとするセレブ達の姿をとらえた作品群。



### 三宅 章介 Akiyoshi Miyake “追憶の消失点”

昭和25年以前に建てられた伝統的木造建築である京町家。数世代にわたって継承されてきたが、近年は年間800軒が取り壊されており徐々にその姿を街から消している。京町家は「うなぎの寝床」と呼ばれるように、通りに面して隙間なく狭い間口を連ねており、解体された後もその痕跡が両隣の建物の壁に残る。かつてそこにあった人々の営みをしのばせつつ、無限遠へと収斂する左右二つのパースペクティブをとらえたシリーズ。



### 橋村 豊 Yutaka Hashimura “terrestrial”

自然豊かな地域に生まれ育った作者が、身近にある地球温暖化の影響を観察し撮影したシリーズ。フランスの哲学者ブルーノ・ラトゥールが提唱する、グローバルでもローカルでもない3つめの新しい概念「テレストリアル」（大地、地上）に出会い、地球上の生命に関わる全てのことが起きている“地球の薄膜”で、フィールドワークを通して綻びを見つけ、記録し続けている。